

## 啓示 11章の「二人の証人」とは誰ですか

(啓示 11:2 - 4)「…彼ら（諸国民）は聖なる都市を四十二か月のあいだ踏みにじるであろう。そしてわたしは、わたしの二人の証人に、粗布を着て千二百六十日のあいだ預言させる」。これらの者は、二本のオリーブの木、また二つの燭台によって象徴されており、地の主の前に立っている。

この二人の証人の活動期間は、諸国民がエルサレムを踏みにじる期間と同じ、42ヶ月です。この期間はダニエル書7章で第4番目（最後）の獣が聖徒を悩ます「3時半」に該当する期間でもあります。そして、その終わりに「底知れぬ深みから上る野獣が彼らと戦い、彼らを征服して殺す」とされています。

(啓示 13:5 - 7)「…大いなることや冒とく的なことを語る口がそれに与えられ、また、四十二か月のあいだ行動する権威が与えられた。そして、それは口を開いて神を冒とくした。そのみ名と住まい、さらには天に住む者たちを冒とくするためであった。そして、聖なる者たちと戦って彼らを征服することが許され、あらゆる部族と民と国語と国民に対する権威がそれに与えられた。」

(啓示 13:10) 捕らわれの身となるはずの者がいるなら、その者は捕らわれの身となる。剣で殺す者がいるなら、その者は剣で殺されなければならない。ここが聖なる者たちの忍耐と信仰を意味するところである。」

しかし、活動期間中の「二人の証人」の権威と力は凄まじいものです。

(啓示 11:5 - 6)「彼らを損なおうと思う者がいれば、火が彼らの口から出て、その敵たちをむさぼり食う。彼らを損なおうと思うような者がいれば、その者はこのようにして殺されねばならないのである。彼らには、天を閉ざして、その預言するあいだ雨を降らせないようにする権威があり、また、水を制してそれを血に変え、あらゆる種類の災厄をもって何度でも望むだけ地を撃つ権威がある。」

この二人の証人を「損なおう」とするなら、彼等の口から出る火でむさぼり食われることになるのですから、この力と権威を、3年半後の、自分たちが殺されようとする時に用いれば、殺されずに済むでしょう。むしろ相手をやっつける事さえできるはずです。

彼らは、殺されますし、その死体は晒しものにされます。彼らは紛れもなく「人間」です。

思い起こして下さい。この彼らの活動は、「聖徒たち」が野獣の手に渡され、少なからぬ「殉教者」も出ると預言されている迫害の真っ最中であり、他の預言からするとこれは「2度と起きないような大患難」の最中でもあります。

二人の証人が、その時存在するクリスチャンの代表なのか、まったく特別な預言者なのかその正体は不明ですが、しかし、ともかく、神とキリストの側に立つものであることは明白なのに、その、仲間である「聖徒たち」が迫害され、殺されているのに、その敵に対して、あらゆる災厄で何度でも望むだけ打つ力が有るのに、なぜ、その迫害を止めさせることもなく、まして自らの死を防ぐこともできないのでしょうか。

やはりこれらの表現は当然のことながら比喩的な表現であると言えます。とりわけ「口から火を吐く」という表現はそれを物語っています。用いられている表現、例えば「天を閉ざして、その預言するあいだ雨を降らせない」「水を制してそれを血に変え」などから、かつての預言者エリヤやモーセの再来などの解説もありますが、強力な力をもって、業をなした過去の著名な預言者を彷彿とされるこれらの記述の意味するところは、それまでの全てにまして、この終末期での業は、何人も留め得ない、強力な証しが諸国民に対してなされると言うことを示そうとしているにちがいありません。言い換えれば、「証人」としての彼らの役割は、成し遂げられずに終わることはないという保証の言葉になっているということでしょう。

また彼らが「粗布」をまとっているのは、正に迫害を受けながらの証しの業であるということでしょう。

そして、この二人は「地の主の前に立っている」ということですが、それは、主の言葉を証しする人類の代表者として、全地の前に立っているということでしょう。つまり、クリスチャンの、或いは、主の僕の「代表」と言うより、主からの福音を持つ者として、全人類の代表として、その役割を担っているということでしょう。

この「証しの業」は福音書の中で、大患難の最中に行われる「王国のこの良いたよりは、あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられる」と預言されている出来事と同一の記述と捉えることができます。

(この点に関する詳細は「No.20 「良いたよりがまず宣べ伝えられねばならない」とはどういう意味ですか」ご覧下さい)

(マタイ 24:9 - 14)「その時、人々はあなた方を患難に渡し、あなた方を殺すでしょう。またあなた方は、わたしの名のゆえにあらゆる国民の憎しみの的となるでしょう。またその時、多くの者がつまずき、互いに裏切り、互いに憎み合うでしょう。そして多くの偽預言者が起こって、多くの者を惑わすでしょう。また不法が増すために、大半の者の愛が冷えるでしょう。しかし、終わりまで耐え忍んだ人が救われる者です。そして、王国のこの良いたよりは、あらゆる国民に対する証しのために、人の住む全地で宣べ伝えられるでしょう。それから終わりが来るのです。」

これらの事から導き出せる結論は、「二人の証人」とは、三時半、野獣の手に渡される「聖徒たち」そのものを指しているということです。  
では、なぜ「二人」なのでしょう。

後半はこの点を考慮してみたいと思います。

この論証の前提となっているのは、ヨハネ10章の「二箇所から取り出される羊」に関する記述の理解に基づいています。(詳しくは『「ほかの羊」とは誰ですか』をご覧ください)

ヨハネ10章には律法契約という「この囲い」からと、それ以外から、つまりユダヤ人と異邦諸国民という「ほか」からの双方から連れ出された人々がクリスチャンとして、一人の羊飼いいエス・キリストの元に「一つの群れ」とされることについて述べられています。そういうわけで、キリストに信仰を働かせて献身したクリスチャン全ては、人種に関わらず文字通り「一つの群れ」と表現されることになります。

しかし、聖書は時としてこの両者を区別しています。とは言っても差別ではありません。その「区別」とはどういうものかと言いますと、神がアブラハムと結んだ契約が関係してきます。

主にローマ人への手紙11章全体をよーく読むとそれがはっきりと理解できます。  
これから暫く、ローマ書からその点を見てみることにしましょう。

まず、パウロは生来のイスラエル人をどうみなしたか。を考えます。

「(ローマ 11:1-2)「わたしは言います。神はご自分の民を退けられたわけではないでしょう。断じてそのようなことはないように！ わたしもイスラエル人であり、アブラハムの胤の者、ベニヤミン部族の者だからです。神はご自分が最初に認めた民を退けたりはされませんでした」

パウロは先ずここで生来のユダヤ人を「神はご自分の民…」「最初に認めた民」と述べて、少なくともここでは、非ユダヤ人を「ご自分の民」の中に含めていません。

「(ローマ 11:11 - 12)「そこでわたしは尋ねます。彼らはずまずいて全く倒れてしまったのですか。断じてそのようなことはないように！ しかし、彼らの踏み外しによって諸国の人たちに救いがあるのであり、それは彼らにねたみを起こさせるためです。さて、彼らの踏み外しが世にとって富となり、彼らの減退が諸国の人たちにとって富となるのであれば、彼らの数のそろうことはなおのことそのようになるはずです。」

「富となった」ということなので、「世」あるいは「諸国の人たち」の中のクリスチャンになり得た人々に言及しています。そして、諸国民に「救い」の道が開かれた理由は、ユダヤ人達が、諸国民も「神の王国を受け継ぐ」ということを知って、自分たちだけが神の選ばれた民であると自負していた彼らに、「やきもち」を起こさせて、その結果奮起したユダヤ人をもう一度、恵みの元に戻すという目的もあったと記しています。

(ローマ 11:23 - 24)「また彼らも、信仰の欠如のうちにとどまっていなければ、接ぎ木されることになるのです。神は彼らを再び接ぎ木することができるからです。

というのは、あなたが本来野生のオリーブの木から切り取られ、自然に反して園のオリーブの木に接ぎ木されたのであれば、まして、本来それに属するこれらのものは自らのオリーブの木に接ぎ木されるはずだからです」

ここではユダヤ人は「本来」のものと表現されています。

(ローマ 11:28 - 29) …神の選びについて言えば、彼らはその父祖たちの益のために愛されています。神の賜物と召しとは、神が悔やまれる事柄ではないからです。(「神の賜物と招きとは取り消されないものなのです。）」[新共同訳]

最初の神の(ユダヤ人の)選びが失敗に終わることはないということです。

肉のイスラエルは完全に捨て去られ、もはや、他の異邦諸国民と異なる所は何もなくなつたと捉えている人も少なからずいますが、聖書は一貫して、生来のユダヤ人の「特別性」は不変のものであることを示しています。

こうした記述は、基本的に、「神は全人類の創造者で」「不公平な方ではない」という認識、また「イスラエル人を選んだのは過去の一時的な取り決め」と考える、多くの「人」の感覚と幾らかのずれを生じさせているものとなるでしょう。

だからこそパウロは、この論議の結びのところで、この言葉を記しているのかもしれませんが。

(ローマ 11:33-36)「ああ、神の富と知恵と知識の深さよ。その裁きは何と探りがたく、その道は何とたどりがたいものなのでしょう。「だれがエホバの思いを知るようになり、だれがその助言者となったであろうか」、また、「だれがまず神に与えてその者に報いがされなければならないようにしたのだろうか」とあるのです。すべてのものは神から、また神により、そして神のためにあるからです。」

それで、ともかく、全てのクリスチャンが与っているのは、「アブラハム契約」の成就であり、異邦人クリスチャン(他の羊)は法的な措置として、つまり「養子縁組」によって、アブラハムの胤なのであり、生来のユダヤ人が「異邦人化」したのではなく、異邦人が「ユダヤ人化」した結果なのです。

言い換えれば、神の選びと恵みが、(最初の選びをご破算にして)普遍的なものに変わった故に、ユダヤ人をも「普遍化」して、「全ての国民の一つ」として受け入れると言うのではなく、飽くまで、クリスチャンとなる異邦人を「特化」(特別扱い)して、「アブラハムの胤」とすることによって、「神の特別に所有する民」とされたという事なのです。

というわけで、その目的からいっても、ユダヤ人の「特別性」は依然として保たれているのです。

この「特別性」の持続というのは、むしろ、神の目的、取り決めの中で、常に見られる特徴です。

このことがはっきり理解されると、大いなる謎として論議が絶えない「14万4千人」についても、霊的な視界は鮮明になって来ます。

(詳しくは「No.9 「14万4千人」を改めて検証する」をご覧ください)

啓示の書の中でも、イスラエル12部族から選ばれた「14万4千人」と「すべての国民と部族と民と国語の中から来た、だれも数えつくすことのできない大群衆」（啓示7：4-9）つまり異邦人クリスチャン（他の羊）と分けて記述しています。

さて、ここから、話しを戻して、これらの情報とテーマである「二人の証人」との関係性を説明してゆくことにしましょう。

この二人は「地の主の前に立っている」ということですから、それは、主の言葉を証しする人類の代表者として、未だ信仰を示さないユダヤ人と異邦人のグループの双方のそれぞれの代表として、ユダヤ人クリスチャンと異邦人クリスチャンの2種類がキリストによって立てられたものと捉えることができます。

